四人姉妹はおじいさんの言葉なんのおかしなやらさげる、よいかな、に現れる森の木という木に、この中「吊り橋をわたって、いちばん最初みました。

四人は、おかし、と聞いて息を飲疑うならば覗いてみるがよい」「この中にはおかしが入っておる。い取りました。

おじいさんはまきの手から箱を奪「乱墓にしちゃいかん」

ながら、たずねますと、

「まきが転がっていた箱を差し出し「これって、この箱のことですか？」

とをいいました。

も切れ切れおじいさんはそんなこ四人姉妹が助け起こしますと、息ていってくだされ」

「これを、どうかこれを、森へもっは道の真ん中に倒れていました。

いさんと出会いました。おじいさん

帰り道、四人姉妹は見知らぬおじが大将でした。

弟のひろしは、近所のこどもたちのひろしというは四人姉妹の弟です。

ゆきとみきも立ち上がりました。

やったら、人変だもの」

「そうね。ひろしに全部食べられちまうわね」

食いしん坊のひろしに食べられてし「ここでゆっくりしているうちに、

す。

さっさと立ち上がったのはまきで

へ帰りましょう」

「ぐずぐずしてないで、早くおうち

きゅっとおなかをならしただけでし

い。いちばんちいさなまゆみは、ただ

ちがいないわ」

ままでに食べたことのないおかしに

うとぼんかんをいっぱいのせた、い

んだマフィンの上に、りんごとぶど

「きっと、バターをたっぷり練り込

れったいとばかりに、

それを聞いていた妹のみきは、じ

ぼんかんだって入っていたわ」

けじゃなくってよ。ぶどうだって、

「冷蔵庫に入ってたのは、りんごだ

すかさず、反論しました。まきは

くんと唾を飲み込みました。まきは

二番目のおねえさんのゆきがごっ

見たんだもの」

がいっぱい入っていたのをほっきり

いわ。だって、冷蔵庫の中にりんご

り使った、アップルパイにちがいな

「いいえ、まっかなりんごをたっぷ

ねえさんのまきでした。

そういったのは、いちばん上のお

したんだもの」

おったとき、バターのいいにおいが

ィンだわ。だって、お台所の前をと

「きょうのお八つはぜったい、マフ

いました。

からずっと、熱心におしゃべりして

るほどひたいをくっつけて、さっき

椅子にそろって腰かけて、ぶつつか

い四人姉妹がいました。四人姉妹は

あるところに、甘いものに目がな

さんのポケットから、ころんと何や

にさすっています。すると、おじい

をさすりました。まゆみもいっしょ

こんどはみきがおじいさんの背中

ぐあいでもわるいの」

「おじいさん、どうしちゃったの。

れに、よくようも、まったく同じな

のでした。

ひと文字もちがっていません。そ

疑うならば覗いてみるがよい」

「この中にはおかしが入っておる。

同じことを、くりかえしたのです。

おじいさんは、さっきとまったく

ていってくだされ」

「これを、どうかこれを、森へもっ

が起こったのでした。

「おじいさんったら」

黙っていました。

ばかりに、おじいさんはむっつりと

わるいことには無視で決め込む、と

ゆきがそう声をかけても、都合の

た。

「ねえ、おじいさん」

まきはゆきのひじをつっつきまし

よ」

ぶらさげた木が森にできあがるんだ

間だよ。あっという間に、おかしを

からな。彼らにためばあっという

「森の入り口にはぼくの仲間がいる

と若々しいのです。

おじいさんの声にしては、ずいぶん

ゆきはあることに気がつきました。

大きくなった声を聞いて、まきと

し、心配はいらん」

たった四人では大変だろうな。しか

木という木にぶらさげねばならん」

「この十億個のおかしを全部、森の

ました。

びっくりして、思わずあとずさりし

んの声が大きくなりました。姉妹は

すりました。すると急に、おじいさ

おじいさんの肩をまきとゆきがゆ

ごくちっちゃいじゃないの」

「そうよ。もし入ってたって、すっ

そんなに入るはずないもの」

「うそよ。こんなちいさなところに、

した。

まきとゆきは、そわそわし始めま

歩も動けずにいます。

ゆみは大きな目を見開いたまま、一

こがちらっと見えたほどでした。ま

たちに口を動かしました。のどちん

ゆきは「じゅおくこ」というか

みきは「じゅおくこ」

入っているんだからな」

「なんせ、おかしは全部で十億個。

た。

おじいさんはちょっと微笑みまし

呈しよう」

「四十個くらいはおだちんとして贈

した。

「まきとゆきが口をそろえていいま

「おかしってだけじゃわからないわ」

「おかしって、何のおかしなの」

気になってしかたがなかったのです。

にどんなおかしをさしているのか、

おかしって言葉が、はたして具体的

か、ぜんぜん聞いていませんでした。

とふるえていたのです。

て引き返し、電信柱の陰でぶるぶる

まゆみは吊り橋をわたる際がこわく、

最終的な結論でしたが、ほんとうは、

これがまきとゆきとみき、三人の

だ」

「きっと、お八つを食べに帰ったん

も見つけることはできませんでした。

しました。しかし、まゆみの姿はどこに

姉妹は手分けしてあちこち探しま

に、何の音も聞こえなかったのです。

「バターをたっぷり練り込んだマフ

ゅっとおなかをならすはずですの

らお八つの想像をふくらませすぎて、

いつもならまゆみは、話を聞きなが

っぱりさっきとおんなじ議論をまき

ようのお八つがなんだったのか、や

わたりきったあとのことでした。き

ったことに気づいたのは、吊り橋を

いちばん年下のまゆみがいなくな

せん。

しはたしかに入っているかもしれま

しようけれど、四十個くらいのおか

が入っているかもしれないのです。

見たこともないお八つ箱の中には、

それにひきかえ、このまきのこと

かしのただの組み合わせにすぎない」

まきはきっぱりといいきりました。

つまるところ、いままで食べたお

インの上に、りんごとぶどうとぶん

かしをいっぱいのせたおかしって、

たのです。

かしが入っているように、思えてき

てもおいしい、見たことのない、お

箱が開かないことって、なんだかとっ

て、森へ向かうことに決めました。

四人はけっきょく、吊り橋をわた

でした。

まり乱墓に扱うわけにはいきません

かなかったのです。もとより、あん

て、四人でどうやったって、箱は開

ていたのと話はちょっとちがってい

それにじつのところ、人形がいっ

ん。でもしかたなかったのです。

そう思われる人もあるかもしれませ

ておお八つを食べに帰るのはひどい、

人形だとはいえ、たのみごとをむげにし

しょう」

なかったら、お八つを食べに帰りま

ね。それで、たいしたおかしじゃ

「そうよ。箱を開けてみればいいん

まきは人形から箱を取り上げました。

テープがそうくりかえしています。

もう何度目になるのか、カセット

疑うならば覗いてみるがよい」

「この中にはおかしが入っておる。

らぶか、姉妹はまさざ悩みました。

そんなことは無理です。どっちをえ

ほしかったのですけれど、もちろん、

とっておだちんのおかしと、どっちも

からだが二つあるんなら、お八つ

もう聞もなくお八つの時間でした。

した。

おじいさんは人形だったので

た。小型のカセットプレーヤー、で

ら、四人の足もとに転がり落ちまし

裏面